

1-7					
主題	趣味を媒介としたイベント構築の実践報告				
副題	職員教育と高齢者アクティビティを統合した仕組みづくり				
キーワード 1	イベント構築	キーワード 2	職員教育	研究(実践)期間	24 ヶ月

法人名・事業所名	社福) 亀鶴会 特別養護老人ホーム神明園
発表者(職種)	菊田鉄平(介護職員)
共同研究(実践)者	中村直人(介護部長)、土岐佐千子(介護副部長)

電 話	042-579-2711	F A X	042-579-6868
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	東京の西部に位置する羽村市(人口約 5 万 7 千人)に、市内 3 番目の特養として平成 11 年に開設した従来型市設です。定員は 120 名で居住フロアは 2 階、3 階、4 階になっています。「地域社会に開かれた園づくり」「楽しみ」「くらし」、そして「よろこび」の 2 つの理念を掲げ、全員参加による生活支援の実現を目指しています
-------	---

<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>イベントのマンネリ化が感じられてきた中、更に新型コロナウイルスの流行による大規模イベントの実施困難な状況が続き、入居者へのサービスの質の低下、職員間の職場内外でのコミュニケーションの機会が減少している状況があった。特に新人職員に関しては、自ら先輩職員へ質問する傾向が少なく、セルフマネジメント力の強化も指導内容とし必要ではないかと感じた。また、新人職員および若手職員は一般的な食に対する知識、経験が乏しく、支援対象となる高齢者の方々の入居以前の生活がイメージ出来ていない為に、ケアに活かす事が出来ていない状況が危惧された。</p> <p>上記課題に対し職員個々の趣味や特技を媒介とした活動を通じ、職員間の親睦も図りつつ、介護職員として入居者への楽しみの提供とは何かを伝え、サービス提供につなげる場をプロデュースできないかと考えた。媒介とする方法は、釣りが趣味の職員が数名いる事から職員が率先して取り組めると想定し、過去に実施していたマス焼き会というイベントをブラッシュアップし研修としての仕組みを整えた。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>【目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若手職員を対象とし、指導役として中堅職員を配置する事で、職員間のコミュニケーションを図る場の形成及び、食材調達から調理、提供までの過程を体験し、食に対しての考え方を学ぶ。 ・若手職員と指導職員が共通の目的を持った一連の活動を楽しみながら行うことで、チームとしての統合を図る。 ・若手職員が柔軟なイベント構築の視点を持ち、自信をもって企画を立案できるスキルを身に付ける。 <p>【仮説】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若手職員自らが入居者様においしい魚を提供するため、慣れない「釣り」や「下処理・調理」を職員間でコミュニケーションを取り、楽しみながら実施することでチームビルディングが図れる。また、実際に
--

入居者に提供したものが「おいしい」「楽しかった」「よかった」などの言葉や笑顔につながることで、成功体験を得ることができ、さらなるイベント構築への基盤となる。

・「釣った魚を炭火で焼いて食べる」といった、高齢者世代では日常であった体験を共有することで若手職員が「食」について学ぶきっかけになる。

・趣味や特技を取り入れた柔軟なイベントを企画、運営が実践できるようになる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ① 対象者選定および釣りをレクチャーできる職員を選定
- ② 釣行時間及び釣行場所を確認
- ③ 釣り・下処理・食材管理
- ④ 対象職員主催にてマス焼き会イベントを開催
- ⑤ 対象者との面談を通し意識変化を図る

《4. 取り組みの結果》

職員への効果としては、釣りを媒介としたことで未経験の職員は積極的に指導職員に聞く姿勢が見られ対象職員を1年目～3年目の職員とした事で、フロア間でのコミュニケーションが未熟な職員においても職場外での職員間のコミュニケーションを図る良いきっかけに繋がり、研修後は職場内でも話しやすい環境に繋がった。また、先輩職員から指導された事を遂行するだけでなく、イベントを自ら企画し開催する事で入居者からの喜びの声や反応が仕事に対するやりがいへと繋がった。

入居者への効果としては、目の前で焼いた魚を直接手掴みで食べる方がいたり、その魚を職員が釣ってきた事を知ると更に美味しく感じるという反応があり、それぞれの食の喜びを感じる事ができたのではないかと考える。

《5. 考察、まとめ》

本研修後の対象者との面談を通し、フロアが異なる職員間のコミュニケーションを図るきっかけに繋がったとの意見や、入居者が喜んで魚を食べていた様子を見てやりがいを感じたとの意見もあり、職員同士の信頼構築を図るきっかけにも繋がったと考える。また、釣りの経験の有無や男女問わずに参加できる事も本研修が全職員対象で実施できる事から、今後も職員研修として取り組んでいきたいと考える。

また、入居者が「焼き魚」を食べる際、頭から丸かじりするといったケースもありリスクマネジメント的視点とともに食文化に対して新たな考察も生まれた。今後も様々な活動を媒介として職員教育と入居者の暮らしの「よろこび」を提供していきたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「アクティブ福祉 in 東京' 11～' 21 大会資料」(2011～ 2021) 東京都社会福祉協議会高齢部会
「食育の推進 食育とは」農林水産省 <https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/>

《8. 提案と発信》

決められたイベントを提供するだけでなく、自らイベントを構築して楽しみを提供する事ができる職員を育成していく事が、入居者・職員双方におけるQOLの向上に繋がっていくのではないだろうか。また、イベントを自身で一からプロデュースし完結させる事で達成感を感じる事ができ、職員個々の仕事への自信にも繋がり自己肯定感を高める事にも繋がっていくのではないだろうか。

職員間の信頼関係が構築される事で、些細な事でも互いに相談し合う事ができ、離職率の低下にも繋がるとのではないだろうか。